第４課　聖書　私たちの神学の権威ある源

【暗唱聖句】

「そして、教えと証しの書についてはなおのこと、「このような言葉にまじないの力はない」と言うであろう」イザヤ8章 20節

【日曜日・伝統】

ファリサイ派の人々や律法学者たちは、神様の教えよりも伝統や言い伝えを優先する傾向がありました。これは正しく聖書の言葉を理解することができないことから来ていたのでしょう。そんな彼らとイエス様とのエピソードの一つがマルコ7章に出てきます。ここで、ファリサイ派の人々や律法学者たちは、手を洗わずに食事をしようする弟子たちを見て、「なぜ、あなたの弟子たちは昔の人の言い伝えに従って歩まず、汚れた手で食事をするのですか」（マルコ7：５）と尋ねます。今コロナウイルスの問題で手洗いが大切だと言われていますが、ここで出てくる手洗いとは、汚れを落とすためのものではなく、儀式的な清めであり、それはすべての食事の前に、また料理が変えられるたびに手を洗わなければなりませんでした。また、その洗い方も、洗うための水も決まっていて、それを守らなければ清めにはならないのでした。彼らにとってそうすることが宗教だったのです。しかも、それが聖書に書かれてあることならまだしも、そうではなく昔からの伝統であり、口伝律法と呼ばれる言い伝えの類でした。彼らはいつのまにか、神様の言葉よりも伝統・言い伝えのほうを重んじるようになっていたのです。そんな彼らに、イエス様は「あなたたちは、受け継いだ言い伝えで神の言葉を無にしている」（マルコ7:13）と言って戒めたのでした。日本人も伝統を重んじる民族性がありますので、わたしたちも伝統が聖書の言葉よりも大切になることのないように注意しなければなりません。たとえそれが教会の中で古くから言われてきたことであってもです。

　では、神様の言葉と伝統をどのように区別したら良いのでしょうか。一つはパウロがコリントの教会に対して、「何かにつけわたしを思い出し、わたしがあなたがたに伝えたとおりに、伝えられた教えを守る」（第一コリント11:2）ようにと言ったように、いつも御言葉を思いだし、それを書かれてある通りに守ることを習慣としてくなら、区別ができなくなることはありません。また、「怠惰な生活をして、わたしたちから受けた教えに従わないでいるすべての兄弟を避けなさい」（テサロニケ二3章6節）とあるように、御言葉に逆らって生きている人々を避けることです。

【月曜日・経験】

わたしたちは日々、様々な経験をしています。喜びや感動もあれば、悲しみや辛いこともあるでしょう。その一つ一つの経験を通して、人は成長させられます。それは良い方向への成長もあれば、その逆もあるので常に注意が必要です。パウロが、「エバが蛇の悪だくみで欺かれたように、あなたがたの思いが汚されて、キリストに対する真心と純潔とからそれてしまうのではないかと心配しています」（コリント二11：3）と語っているように、キリストに対する真心と純粋をそらそうとするものがこの世界にはたくさんあります。経験したことがすべて真実なのではなく、常に聖書と照らし合わせて用心していくことが大切です。また、ローマの信徒への手紙2章4節には次のように書かれてあります。

「神の憐れみがあなたを悔い改めに導くことも知らないで、その豊かな慈愛と寛容と忍耐とを軽んじるのですか」。

通常、犯罪を犯したなら、警察に捕まって裁判にかけられ、刑に服さなければなりません。神様のみ前においてもこれは同様です。しかし、憐み深い神様は、わたしたちが悔い改めるのをじっと待っておられ、裁きの瞬間を最後の最後まで伸ばしておられます。そのため人は往々にして神様の「慈愛と寛容と忍耐とを軽んじ」てしまうのです。聖霊が働くとき、わたしたちは自分の罪深さが示されます。しかし、自分でその罪に勝利することができないので、苦しむことになります。そのとき、わたしたちが痛感するのは、神様の憐みなしには救われないということです。神様の憐みがわたしたちを悔い改めに導くとは、本当にその通りなのです。このような経験を通して、わたしたちは神様の身元に引き寄せられていくのです。ちなみに聖書の悔い改めとは、罪を犯さなくなるという意味ではなく。神様のほうにむきかえるという意味です。神様に背を向けていた人生を悔い改めて神様のほうにむきかえり、神様と共に生きることを、悔い改めというのです。もし神様の憐みがなく、すぐに罪の裁きが下るとしたら、誰一人、神様の元に行けず、救われないでしょう。

【火曜日・文化】

わたしたちは日本文化の中で生きており、意識せずともその影響を多く受けています。他の国の人たちはそれぞれその国の文化の中で生きており、そのことによって日本人とは考え方や行動様式が異なることも多いことでしょう。聖書も同様に、イスラエルの文化が背景にありますので、それを理解しないとわからないことも少なくありません。また歴史的にエジプトやバビロンあるいは周辺諸国の文化の影響を絶えず受けていました。その結果、神様から離れてしまうこともしばしばでした。聖書のメッセージは1つの文化に限定されていません。その教えは、既存の文化の範疇を超え、普遍的です。そのためどの国の、どの文化に属していても、等しく自分に語られたメッセージとして受け取ることができるのです。

聖書は、「世も世にあるものも、愛してはいけません。世を愛する人がいれば、御父への愛はその人の内にありません」（ヨハネの手紙一2章15節）と語っています。これまで築き上げてきた文化は大切なものです。善いものもたくさんあります。しかし、神様以上に文化のほうを愛することがあるとすれば、それは世を愛することと同じです。この点は注意しなければなりません。なぜなら世を愛すると、神様への愛は弱まってしまうからです。聖書は弱まるどころか、はっきりと神様への愛はないと言っています。

【水曜日・理性】

人間は誰もが理性を持っています。冷静に考える力、合理的に考える力です。これは神様から人間に与えられた賜物の一つです。常に神様の御前において、この与えられた理性を働かせるなら、それは大いに祝福となることでしょう。ところが、18世紀の啓蒙時代をきっかけに、西欧社会の中で、人間の理性が神様の言葉以上に重んじられるようになっていきました。やがて合理主義と呼ばれるようになるこの味方は、真理は感覚的なものではなく、知的な物であり、理性によって得られると考えます。このようなことを意識していなくても、多くの人が、聖書の言葉を幼子のように素直に信じるのではなく、まず理性的に考えて受け入れることができるものだけを受け入れていくわけです。しかし、人間の理性、合理的に論じる力も当然のことながら罪の影響を大きく受けています。そのため理性は、神様の言葉を素直に受け入れることを拒むのです。

　しかし、聖書は「神の知識に逆らうあらゆる高慢を打ち倒し」（第二コリント10:5）と、理性が神様の言葉を上回るという思いは人間の高慢から来るものであり、「主を畏れることは知恵の初め。無知な者は知恵をも諭しをも侮る」（箴言1:7）とあるように、そのような考えや態度は無知から来るのだと断じています。主を恐れることなくして、真の知恵を得ることはないのです。

【木曜日・聖書】

わたしたちは、聖書こそわたしたちの唯一の行動や考えの基準であり、伝統や経験、理性や文化よりもはるかに高い権威を持っていると考えます。仮に、ある人が聖霊によって啓示を受けたと主張したとしても、それは聖書を上回ることはありません。もし聖霊から来ているのではれば、その啓示の内容は聖書の御言葉と一致することでしょう。もし自分の霊的な経験を強調するなら、それはとても危険なことです。エレン・Ｇ・ホワイトは「聖霊は聖書を通して心に語り、真理を心に印象づける」（各時代の希望下Ｐ156）と語っています。